

「どうすべき」より、「どうしたい？」

月野ぽぽなさんが俳句で見つけた、ありのままの私



以前、NHKの俳句番組に出演していた月野ぽぽなさんを初めて拝見したとき、静かな佇まいから放たれる聡明な俳句の批評に、どこか緊張感が漂うイメージがありました。7月初めに、一時帰国を終え、ニューヨークへ戻る前に役場に立ち寄られ、ご挨拶からお話する機会を得ることができました。箕輪町の自然の中で育ち、音楽を学び、夫の夢とともにニューヨークへ渡ったぽぽなさん。そ

の地で俳句と出会い、自分の感覚を言葉にすることで、「ありのままの自分」へと近づいていきました。故郷の記憶、海を越えて届いた作品、異なる価値観の中で気づいたこと、そして今、日々大切にしている心の習慣。お話を伺いながら、ぽぽなさんの歩みをたどりました。

月野ぽぽなさん | 箕輪町出身、ニューヨーク在住の俳人。第28回現代俳句新人賞、第63回角川俳句賞を受賞。2024年7月、第一句集『人のかたち』（左右社）を刊行。俳句・エッセイの執筆、句会、選者、ワークショップ、朗読、講演会など幅広く活動しています。



ハドソン川近くの行きつけの花壇のひまわり

箕輪町の風景が育 てた「まなざし」

ぽぽなさんの記憶の中には、こども頃の箕輪町の風景が、今も色鮮やかに残っています。小学校からの帰り道、歌を歌いながら野原を歩いたこと。四つ葉のクローバーがざっくざくと見つかる場所へ通ったこと。草かんむりを作り、

水田のおたまじゃくしをのぞき込み、草むらに上手に隠れている小さなカマキリを探したこと。見つけた瞬間の驚きを話す表情は、まるで今、その草むらをのぞき込んでいる少女のようでした。

イチイの赤い実を口にしたり、サンショウの実を舌にのせ、そのしびれに驚いたりした思い出もあるそうです。こちらが目を丸くすると、「まだ今も生きていますから、（舐めても）大丈夫だったみたいです」と笑います。自然は眺めるものではなく、触れ、味わい、遊びながら知っていくものだったのでしょう。

何気ない風景の中に面白さを見つけ、「よく見る」。季節の気配や命の一瞬をすくい取る俳人



みのわ BASE にて句集「人のかたち」と



道草：お玉杓子を見つけていた田んぼ

のまなざしは、あの野原ですでに育ち始めていたのかもしれませんが。ぽぽなさんの俳句の根に、箕輪町の土や風や光が確かにつながっているように感じました。

一人娘だったぽぽなさんを、愛情深く育ててくれたご両親。のちにアメリカへ渡るといふ大きな決断も、娘の願いを聞き、受け止めてくれました。「一人娘である私の

渡米を許してくれたことに、とても感謝しています」。そう語る声は柔らかく、今は亡きご両親



松島仲町交差点の夏椿

をすぐそばに感じているようでした。「いつも一緒にす」。その短い言葉に、離れていても途切れない家族のつながりがにじみます。

音楽を携え、夫の夢とともに海を渡る

音楽を学び、大学卒業後は日本で音楽教師として働いていました。クラシック音楽を通して出会った夫は、ピアニストを志していました。1992年、ぽぽなさんは教師の仕事を辞め、夫とともにニューヨークへ渡ります。夫の夢を応援したい。その思いから選んだ渡米でした。けれど、知らない土地で始まったのは、「支える人」だ

けでは終わらない、ぽぽなさん自身の新しい人生でもありました。

現地で探したのは、こどもと教育に関わる仕事でした。日本人家庭のこどもたちが、日本語を維持し、日本文化を受け継いでいくための学校の運営に携わりました。歌が好きで、音楽教師の経験があったことからこどもたちに日本の歌を紹介しました。音楽は海を越えて人と人をつなぐ力になりました。

夫の学びと演奏活動を支えながら、責任ある立場で学校運営に携わる毎日は、とても忙しいものでした。渡米から10年、目の前の仕事と暮らしに懸命に向き合う日々。日本で俳句を作った記憶はほとんどなく、自分が俳人になるとは想像もしていなかったそうです。音楽を学び、音楽を愛する人と出会い、その音楽がニューヨークへ連れてきてくれた。その先に、まだ見ぬ俳句との出会いが待っていました。

「まさか自分が俳句を始めるとは思っていませんでした。人生って、本当に不思議ですね」



紀伊國屋書店ニューヨーク店で句集「人のかたち」
トーク&サインイベント

好きなことに向かって進んだ先で、思いもよらない次の扉が開く。ぽぽなさんの人生そのものがそのことを教えてくれました。

心に泉が湧いた日――

作品が先に海を渡る

俳句との出会いは2002年。ふと訪ねたインターネットの詩歌サイトで開かれていた句会に参加したことがきっかけでした。紙とペンがあれば、場所を選ばず始められる。五・七・五という短い言葉の中に、一つの世界を完成させられる。その手軽さと、作品が形になった時の達成感、そして句会で自分の句を選んでもらえる喜びに、たちまち夢中になりました。



五番街の句会で句作中のぽぽなさん

「俳句を作ったとき、心に泉が湧くような感じがしたんです」

その言葉を口にしたとき、ぽぽなさんの表情がぱっと明るくなりました。俳句に出会えたことは、本来の自分、ありのままの自分に気づく大きなきっかけになったといいます。「俳句が私のところへ来てくれたんです。私にとって、俳句は宝物なんです。日本ではなく、ニューヨークで出会うことになっていたのだと思う。」と話してくれました。



道草：小学校の登校坂の桜

やがて日本の俳句結社「海程」に入り、ニューヨークから郵便で作品を送りながら、俳壇を代表する俳人、故・金子兜太氏に師事しました。結社の賞を受けたことで、受賞式や全国大会のために帰国し、師や仲間と初めて対面する機会も生まれました。会ったことのない人たちが、自分の句をすでに知っていて、温かく迎え

てくれる。その体験は、ぽぽなさんの心を深く満たしました。本人より先に作品が海を渡り、まだ見ぬ人との間に橋を架けていたのです。



第一句集「人のかたち」(左右社)と講演録「自分と繋がり、自分を生きる」

意味から選んだのではなく、音の響きに導かれるように、ふっと浮かんだ名前。理屈よりも直感を信じて選んだ柔らかな響きは、明るく自由で、どこか芯のあるぽぽなさんの人柄に重なります。名前の由来を尋ねると、「本当にポーンと出てきたんです」とコロコロ笑いました。そしてその答えまで、やはりチャームングなものでした。

多様な街で気づいた

「私はどうしたい？」

ニューヨークで暮らし始め、日本とは異なる価値観の成り立ちを強く感じました。日本では、多くの人がある程度同じ価値観を共有していることを前提に、その中で周囲とどう協調するかが求められます。一方、多民族が暮らすニューヨークでは、人の数だけ異なる価値観があることを前提に、一人ひとりの違いを持ち寄って、どう共存するかを考えていきます。その違いの中に身を置いたことで、ぽぽなさんは初めて、自分の思考の癖に気づきました。



マンハッタンの街の風景1



エンパイアステイトビルディングと野の花とトンボ

周囲から「あなたはどう感じるの?」「どう思うの?」「どうしたいの?」と尋ねられても、最初は答えがすぐに出てきませんでした。自分の気持ちを確認する前に、ここはどんな場か、誰がいるか、周りはどう思うかを考えてしまう。周囲の期待や意見をおもんばかり、「この場ではどう振る舞うべきか」を探すことに慣れていたのです。自分がどれほど周りに依存して考え、行動していたのか。そのことに気づいたのは、大きな驚きでした。

「どうすべきの前に、私はどう感じるのか。どう思うのか。どうしたいのか」

自分の内側に問い、そこで見つけたものを言葉にすることは、初めは大きな挑戦でした。しかし、そ

の問いを重ねるうちに、自分らしさとは、周囲と違うことではなく、自分の感覚を自分で知り、認めることなのだと感じるようになります。俳句は、心の中に潜んでいた「本当は表現しなかった自分」を外へ出す窓になりました。

こどもの頃、「女の子らしくしなさい」と言われるたびに、ぽぽなさんは抵抗を感じていました。ところが大人になると、今度は「女性なら、この場面ではこうすべき」という枠を、知らないうちに自分の中へ取り込み、自分で自分を縛っていたことに気づきます。女性である前に、一人の人間であること、自分が何を感じ、何が好きで、何が得意で、どこに心地よくいられるのか。まずそこから始めることが、自分を生かすことにつながると考えるようになりました。



コミュニティーセンターの親子クラスにて

自分の機嫌を、自分と一緒に取り戻す



ダコタハウス(左側の建物)とセントラルパークのクロッカス

自分らしく生きるために、ぽぽなさんが大切にしているのは「感謝の気持ち」です。生まれた時から人生の最後まで、ずっと一緒にいるのは自分自身。だから、自分の心と体を「一生の友」として大切に、日々感謝を伝えます。

朝、目を覚ますと、まず自分に「おはよう。今日もよろしく」と挨拶をし、生きていることへの感謝を伝えます。一日の中で鏡を見るたびに、「調子はどう?」「よく頑張っているね」「ありがとう」と心の中で声をかけ、心や体の状態に気を配ります。そして眠る前には、どんな一日であったとしても、「今日もありがとう。明日もよろしく」と自分をいたわる。決まった正解の言葉があるわけではありま

せん。その時の自分が楽になり、元の穏やかさへ戻りやすくなる言葉を、自分のために選びます。

「ありがとう」「大好きだよ」「いつでも一緒だよ」。ほかにも、「大丈夫」「なんとかなるよ」「よくできたね」と声をかけ、小さなことができた時にも、自分と一緒に喜びます。自分にどんな言葉をかけたいかを選べるようになると、相手に届ける言葉も変わっていくと話します。ぽぽなさんは、これを誰かに「しなければならない」と勧めるのではなく、あくまで自分の経験として、今も練習していることだと何度も添えました。その言い方に、人それぞれの歩幅を尊重する優しさを感じます。

以前は、「人に優しく、自分に厳しく」することが美德だと思っていた時期もありました。けれど、自分に我慢を強いるほど心は疲れ、余裕を失



セントラルパーク・ベセスダ噴水と石楠花

います。自分が我慢していることを誰かがしていると、その人に悪意がなくても、許せない気持ちが生まれることがあるのです。自分へ優しくすると心に余裕が生まれ、人にも自然に優しくできる。受け取った優しさにも、まっすぐ感謝できるようになりました。

「毎日、幸せに気づく練習です」

画面越しに伝わってきたぽぽなさんの穏やかさは、もともとの性格だけで生まれたものではないのでしょうか。自分の心を見つめ、言葉を選び、自分との信頼関係を毎日少しずつ結び直してきた時間が、その笑顔の奥にあります。自分を満たすことは、自分のためだけではなく、そこから自然にあふれる言葉や行動によって、周りの人も満たしていく。ぽぽなさんの経験から生まれた言葉には、静かな説得力がありました。



マンハッタンの街の風景2

俳句が連れていく場所、句集『人のかたち』



結婚記念日に 馴染みのカフェにて

現在、ぽぽなさんは、日本の俳句・文芸雑誌から依頼を受け、俳句作品やエッセイを執筆しています。日常の中でふっと句が生まれることもあれば、同人誌や句会に向けてじっくり作ることもあります。ニューヨークでは、当地にゆかりのある仲間との句会を続けるほか、朗読会への参加、俳句コンテストの選者、大学や図書館での俳句ワークショップや講演会の講師をするなど、活動は

多岐にわたります。五・七・五から始まった小さな窓は、今では多くの人が行き交う場所へと開かれています。

俳人としての活動と並行して、音楽教師としての経験も今につながっています。現地のコミュニティセンターでは、幼い子どもと保護者に、日本の歌や文化を紹介するクラスを担当しています。箕輪の野原を歌いながら歩いた少女が、ニューヨークで子どもたちと日本の歌をうたう。人生の中で別々に見えていたものが、時間を越えて一つにつながるようで、私はその巡り合わせにも心を動かされました。



夫の木川貴幸(Taka Kigawa)さんと演奏会后に

2024年7月には、待望の第一句集『人のかたち』を刊行しました。第28回現代俳句新人賞、第63回角川俳句賞を受賞した著者による第一句集です。書名は、収録句「まだ人のかたちで桜見えています」から。生きていることの不思議さや、今ここに人のかたちで桜を見ている時間のかけがえのなさが、静かに胸へ届く一句です。

箕輪町で育まれた感性、音楽とともに歩いた時間、ニューヨークで出会った俳句、師や仲間とのご縁。そのすべてが重なり、『人のかたち』という一冊になりました。



ニューヨーク大学での俳句ワークショップ

故郷・箕輪町、

そして次の一歩へ

ぽぽなさんは毎年、夫の演奏会に合わせて箕輪町へ帰り、ご両親が残してくれた家で過ごします。



タイムズスクエアにて

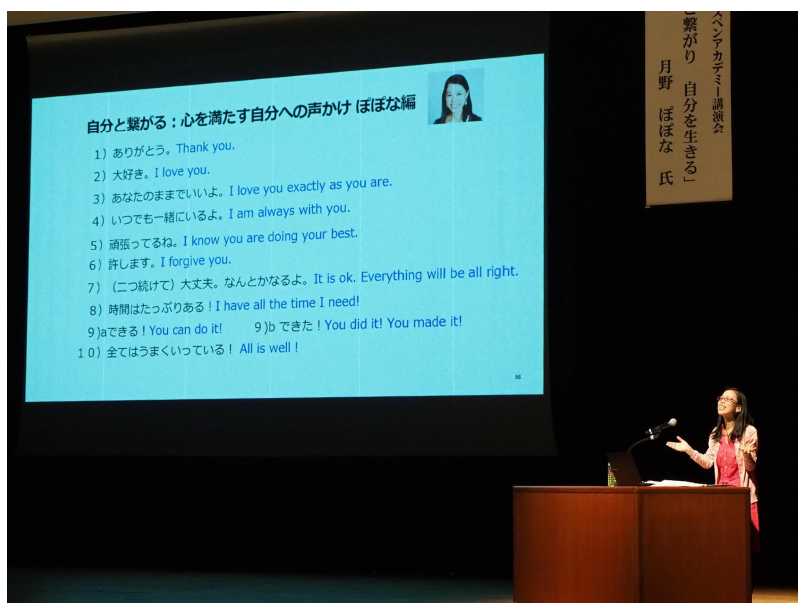
「この素晴らしい地に生まれ育ったことに、とても感謝しています」。その言葉からは、離れて暮らしているからこそ、いっそう鮮やかに感じられる故郷の良さが伝わってきました。ぽぽなさんがこれからの箕輪町に願うのは、そこに暮らす人自身が町の良さを知り、楽しみ、その魅力をどんどん発信していくことです。外から見つめ直した箕輪町には、住んでいる時には当たり前

で見過ごしてしまう宝物が、まだたくさんあるのでしょう。

箕輪町の女性たちについて尋ねると、「私の知る箕輪町の女性は、皆さん明るく、思いやりがあって、笑顔がとても素敵です」と話してくれました。日々の中にある幸せに気づき、感謝しながら、生活を丁寧に重ねている人たち。これからも、自分の心と体をさらに慈しみ、それぞれの光で輝いてほしいと願っています。

そして、夢に向かって一步を踏み出そうとしている人へ。「やりたいこと、なりたい夢に気づいたら、そのこと自体がまず宝物です。気づいた自分に『ありがとう』と言ってください」と。夢を見つけたら、今できる小さなことから始める。それができたら、そんな自分を褒め、一緒に喜ぶ。すぐに大きな結果が出なくても、前向きな心から生まれた小さな行動は、自分では思いもよらないほどの素晴らしい人や場所との出会いへ導いてくれると、ぽぽなさんは信じています。

未来についても、何年後までニューヨークにいるかを、今から頭だけで決めようとはしていません。「どこへ行きたいか」「何をしたいか」という思いが見えてきたら、それを一つずつかなえていきたい。ただ、今の生活は充実していて、とても幸せだと、ぽぽなさんは晴れやかに話しました。未来を急いで決めつけず、



伊那北高校薫ヶ丘クロスベンアカデミーでの講演

自分と相談しながら歩く姿にも、「どうすべき」より「どうしたい」を大切にする生き方が表れています。

まとめ

今回の取材は、日本とニューヨークをつなぐ Zoom で行いました。画面越しではありますが、ぽぽなさんの明るい笑顔と穏やかな声からは、言葉を一つひとつ丁寧に選び、相手の心へ届けようとする温かさが伝わってきました。事前にアンケートをお送りしていたのですが、それらをひとつずつ本当に丁寧に答えてくださいました。

箕輪の自然の中で音楽を愛し、その音楽が夫との出会いと渡米につながり、ニューヨークで俳句と出会う。ぽぽなさんの歩みをたどると、「好き」「やってみたい」と感じたことが、思いもよらない次の扉を開いてきたことが分かりました。

取材を終えて、都会の時間の流れの速さや多様な価値観の中にも、自分らしい世界を失わず、周りへやわらかな風を送る人。ぽぽなさんは、そんな人なのだと思います。

箕輪町からニューヨークへ、音楽から俳句へと歩んできたぽぽなさんの言葉は、海を越えて、私たちに優しく、チャーミングに届きました。

そして今回、にじいろ共生会議で実施した「みんなが輝く みのわ川柳コンテスト ～わたしらしく、あなたらしく～」では、最終選考の選者をお願いし、快くお引き受けいただきました。現在、寄せられた作品の選考が進められています。

箕輪町を離れ、ニューヨークで俳句の世界を歩み続けるぽぽなさんと、ふるさと箕輪町との新たなつながりが、ここからまた生まれています。





セントラルパーク・チェリーヒルの桜と

取材：平賀裕子、千田るみ子

構成・執筆：千田るみ子

ご協力・写真提供：月野ぽぽなさん